

中国駐在16年の変遷

改革開放政策に転換して以来の中国の足取りを、
1人の駐在員の目を通してたどってみる。

パナソニック映像株式会社
常務取締役 下垣内利彦

幸之助氏が中国近代化の支援へ

1972(昭和47)年、日本と大陸の中国との間で
国交が回復した。

当時、小学2年生だった私にとって、中国とい
う国は近くて遠い存在だった。住んでいた神戸に
は中華街があり、同級生にも中国人の子どもたち
がおり、高架下商店街には電気製品を買いに来る
中国人船員の姿をよく見かけた。

ただ、TVで見る中国はいつもすすけた街に人
民服と自転車の洪水、赤い本を振りかざして大人
数で何か叫んでいる国だった(そう考えると、当
時すでにわが家はカラーTVがあったんだ!)。
10月には上野動物園にパンダの「カンカンとラ
ンラン」が贈られ、今の「シャンシャン」以上の
大フィーバー。TVはパンダパンダの毎日だった。

78(昭和53)年、中学2年の時、日中平和友好
条約の批准のため鄧小平副首相(当時)が来日し
た。新幹線に乗車した鄧小平副首相は、「速い。
とても速い。後ろからムチで打っているような速
さだ。これこそ我々が求めている速さだ」「我々
は駆け出す必要に迫られている」「今回の訪日で
近代化とは何かが分かった」と絶賛した。日本企
業をいくつか訪れ、松下電器(現パナソニック)
では創業者の松下幸之助氏とこんなやりとりが
あったという。

鄧小平氏「中国近代化のお手伝いを願いま
す」、松下幸之助氏「できることならなんぼでも
お手伝いしまっせ」「21世紀はアジアの時代、と
りわけ中国と日本の時代」と約束を取りつけ、国
際社会に中国の夜明けをアピールした。

文化大革命で10年間の遅れをとっていた中国
の巻き返しが始まった。

富めるところから富んでいけ!

大学2年の時に北京に2カ月間の短期留学の機
会を得た。電力不足による頻繁な停電。ネオンで
なく豆電球で飾られた店の看板。ドロドロの道路。
食堂は決まった時間にしか開かず(昼は11～13
時、夜は17～19時)、ビールは常温(夏でも冷
えたビールは大きいホテルにしかなかった)、テ
レビは白黒が当たり前。街角に食事に行くと「糧
票(食糧配給券)」がないと食べ物を売ってくれ
なかった。

その後、88～90年に北京長期留学。この頃の
北京では、「富めるところから富んでいけ!」の
号令のもと、人々は日本製商品に憧れや興味を抱
き、月収200元(当時のレートで約8千円)くら
いの人民が5千元(同20万円)も1万元(同40万
円)もする家電製品やオートバイを買い求めた。
当時、個人が銀行からそんなに多くのお金を借り
れるはずがなく、親戚や友達から借り集めたお金
でそれらの「神器」を買い求めたのである。また、
学生たちの間では、東欧やロシアの国々がそうで



留学先の寮で家族と(寮母さん、母、筆者、父)